

## 甲虫ニュース

## COLEOPTERISTS' NEWS

Nos. 15, 16 (Jan. 1973)

### カミキリムシの研究史 (4)

草間慶一

属については *Callidium* と *Hylotrupes*, *Necydalis* と *Molorchus*, *Rhopalopus* か *Ropalopus* か、などまだまだ述べなければならぬものが少なくないが、次の機会にゆづり、先に進むことにした。

#### (9) 族 (Tribe) の概念について

Tribe なる語は最初は分類段階で科の上のレベルに用いられる事が多かった。また、カミキリでは Latreille (1825年) や Serville (1832年) は現在の亜科に相当するカテゴリーに使用した。1953年のコペンハーゲンの第14回国際動物学会議で、Tribe は亜科と属の間のカテゴリーの名称として用いと正式に決定された。そして Supertribe は Tribe と Family の間、Subtribe は Tribe と Genus の間に使用しても良い事が認められた。

現在の族 (Tribe) に相当するグループ分けのあつかいは、Mulsant (1839年) からと考えられるが、本格化したのは J. Thomson (1860, 64年) あたりからで、この頃になると属の数は非常に多くなり、亜科の下がすぐ属ではその分類上の位置づけが困難になった。族に関しての最も重要な仕事は、Lacordaire の *Histoire naturelle des insectes, Genera des Coléoptères* vol. 8, (1869年), vol. 9, Part 1 (1869年), vol. 9, Part 2 (1872年) であり、カミキリの族の分類の大部分が定められた。

属の統計の時に用いた Junk の“甲虫のカタログ”中の Prioninae, Cerambycinae, Lamiinae の3つの合計では、カミキリ科は 197 族に分けられている。これらの族の命名者について調べたのが第10表である。Lamiinae については Breuning (1958~67年) が再検討し、その族を約3%に減少した。またその他の亜科についても Gressitt や Linsley などの意見を入れて訂正したものについても、第10表に併記した。Junk のカタログ以降については *Zoological Record* により 1966年までの発表を加えた。

どちらの統計を用いても Lacordaire は現在使用している族の約半分の設立者であり、次に Thomson が約3%である事がわかる。

第10表中の印について説明すると、

a) Junk のカタログ中の Prionine の族は、Lameere 自身が全部作った事になっており、彼以前に作られた族に相当するものはすべて Sub-tribe の命名者に格下げされているので、他の文献を参考として族の命名者に変化したのが( )内の数字である。

b) クロ、ホソ、マルクビ、ハナカミキリの4亜科を含む。Aurivillius のカミキリ亜科中から上記4亜科に含まれる族とその命名者の一部を Linsley (1962~64年) の“北アメリカのカミキリ”や Gressitt の“海南島のカミキリ”などを参考として訂正した。この項中、各亜科の族数は

Spondilinae	1族	Disterinae	3族
Aseminae	3族	Lepturinae	9族

c) Linsley は Mulsant (1839年) の用いた 19 の Branch を族の前身として、現在のカミキリ亜科についてはほとんどすべて認め採用している (第11表参照)。

d) Lane は Cerambycidae と Lamiidae とに分けているので、族に相当するものをすべて亜科で発表しているが、これを族として数えた。

e) Gilmour は 1961年に Tippman の族 (1960年) の置換族を、また 1965年に Breuning のカタログ第8冊目 (Gilmour が著者) 中で、Lane の2つの亜科 (1956年と 1959年) を族に格下げし、彼自身の命名としているが、これらはこの表に加えてない。

#### (10) 日本に関係する族について

##### (i) カミキリ亜科の族

日本産のカミキリは 8 亜科 53 族に分けられているが、この中一番異論の多いカミキリ亜科の族の設立者について、Aurivillius と Linsley らの意見を第11表に示した。

17 族中同意見の族はわずか 2 族しかなく、名の異っているものも 4 族ある。

##### (ii) フトカミキリ亜科

Breuning は彼のフトカミキリ亜科のカタログで大幅に族の離合を行ったが、族の命名者の変更は一

第10表 族の設立者

命名者発表年代		Junk カタログ				訂 正				
		Lame- ere	Aurivillius		計	Gressitt b)	Linsley	Breun- ing	計	
		a) Prion- inae 1913	Ceram- bycin- ae 1912	Lamii- nae 1922		Paran- drinae Prioni- nae	b) Leptu- rinae 他	Ceram- bycinae		Lamii- nae
Leach	1815		0		0			1		1
Serville	1832		1		1			1		1
Mulsant	1839, 62		1 c)	2	3		4 c)	6 c)	2	12
Newman	1841		1		1			1		1
Blanchard	1845	(1) a)		1	1	2			1	3
Chevrolat	1858		1		1			1		1
Fairmaire	1860, 64	(2)	1		1	2		4		6
Pascoe	1866			3	3					0
C. G. Thomson	1866		1		1					0
J. Thomson	1857, 60, 64, 68	(3)	9	33	42	4	2	11	26	43
Lacordaire	1869, 72	(1)	66	44	110	4	2	49	21	76
Bates	1870, 85		1	1	2			1	1	2
Le Conte	1873		5		5		4	3		7
Gahan	1906		3		3	2		2		4
Fauvel	1907				0				1	1
Reitter	1912				0		1			1
Casey	1913			1	1				1	1
Lameere	1902~13	7			7	7				7
Aurivillius	1902~23		4	11	15			4	2	6
Gressitt	1940, 51					1	2		1	4
Linsley	1940, 63, 64							4		4
Breuning	1950, 51, 56								5	5
Lane	1951 56, 59							5 d)	3 d) e)	8
Quentin	1954								1	1
Tippmann	1955, 60								2 e)	2
Lepesme et Breuning	1956								1	1
Hunt et Breuning	1957								1	1
Duffy	1960							1		1
Zajcw	1960							1		1
Villiers	1961							1		1
合 計		7	94	96	197	22	15	96	69	202

第 11 表 日本産カミキリ亜科の族とその設立者

Aurivillius	Linsley ら
Methiini Lac., 1869 } Oemini Lac., 1869 }	Methiini Thomson, 1860
Achrysonini Lac., 1869	左に同じ
Cerambycini Lac., 1869	Cerambycini Leach, 1815 <sup>a)</sup>
Hesperophanini Lac., 1869	Hesperophanini Mulsant, 1839
Ibidionini Lac., 1869	Ibidionini Thomson, 1860 <sup>b)</sup>
Phoracanthini Lac., 1869 } Callidiopini Lac., 1869 }	Elaphidionini Thomson, 1860 <sup>c)</sup>
Gracilini Lac., 1869	Gracilini Mulsant, 1839
Oabriini Lac., 1869	Oabriini Mulsant, 1839
Molorchini Lac., 1869	Molorchini Mulsant, 1862
Thraniini Gahan, 1906 <sup>d)</sup>	[左に同じ] <sup>d)</sup>
Pyrestini Lac., 1861 <sup>d)</sup>	[左に同じ] <sup>d)</sup>
Compsocerini Thomson, 1864	Rosaliini Fairmaire, 1864
Callichromini Lac., 1869	Callichromini Thomson, 1860
Callidiini Thomson, 1860	Callidiini Mulsant, 1839
Clytini Musant, 1839	{ Clytini Mulsant, 1839 Anaglyptini Lac., 1869 <sup>e)</sup>
Cleomenini Lac., 1869	左に同じ
Stenaspini Lac., 1869	Purpuricenini Fairmaire, 1864

a) 筆者の意見 b) 日本には産しない。c) Aurivillius の意見に現在は賛成している。  
d) 新北区には産しないので、Linsley は述べていない。筆者の意見として同じとした。e) Linsley の意見に賛成で、この族を認めた方が良いと思う。Lac. は Lecordaire の略

第 12 表 日本産フトカミキリ亜科の族と設立者

水戸野(1940)	Breuning
Dorcadionini Thomson, 1860 <sup>a)</sup> コブヤハズ ツチイロコブヤハズ	日本には産しない Morimopsini Lac., 1869 Phrissomini Lac., 1869
Lamiini Lac., 1869 } Monochamini Lac., 1869 }	Agniini Thomson, 1864
Batocerini Lac., 1869	左に同じ
Mesosini Thomson, 1860	左に同じ
Ancylonotini Lac., 1869	左に同じ
Xylorhizini Lac., 1872 <sup>a)</sup> <i>Kamikiria</i> <i>Itohigea</i>	日本には産しない Homoneini Agapantiini <sup>b)</sup>
Rhodopini Lac., 1872	左に同じ <sup>c)</sup>
Dorcascematini Thomson, 1860	左に同じ



Xenoleini Lac., 1872	左に同じ
Xenicotelini Matsushita, 1933	Agaiini (Xenicotela) <sup>d)</sup>
Nyctimenini Thomson, 1864 <sup>a)</sup> オビレ	日本には産しない Rhodopini <sup>e)</sup>
Homonoceini Thomson, 1864	左に同じ
Bumetopini Lac., 1872	左に同じ
Hecyrini Lac., 1872	Crossotini Thomson, 1864
Niphonini Pascoe, 1866	Pteropliini Thomson, 1860
Apomecynini Lac., 1872 Ptericoptini Lac., 1872	左に同じ Apomecynini
Apodasyini Lac., 1872 } Estolini Lac., 1872 }	Rhodopini <sup>e)</sup>
Pogonocherini Lac., 1872	左に同じ
Hippopsini Thomson, 1860	Agapantiini <sup>b)</sup>
Emphytoeciini Lac., 1872	Pteropliini
Acanthoderini Lac., 1872	左に同じ
Acanthocinini Lac., 1872	左に同じ
Agapanthiini Mulsant, 1839	左に同じ
Saperdini Mulsant, 1839 Gleneini Lac., 1872 } Phytoeciini Lac., 1872 }	左に同じ Saperdini
Tetraopini Casey, 1913 <sup>a)</sup> ルリ	日本には産しない (トウワタベニ) <sup>e)</sup> Astathini Thomson, 1860
Hebestolini Lac., 1872 <sup>a)</sup> キイロアラゲ	日本には産しない Rhodopini <sup>e)</sup>

a) 例えば水戸野氏のカタログ中ではコブヤハズ、ツチイロコブヤハズカミキリが Dorcadionini 族に含まれていたが Breuning の方では別族の Morimopsini, Phrissomini に属すると言う意味。以下も同様 b)。この印の Agapantiini は Hippopsini で, Hippopsini は Agapantiini のシノニムではないと思う。c) Gressitt の意見のように Rhodopinini とした方が良いと思う。d) チャボヒゲナガカミキリが Xenicotelini 族に入っていた。e) これは北アメリカからの輸入種と思われる。

さい行われなかった。

水戸野氏のカタログ (1940) 中の現在の日本産の族と Breuning のを比べたのが第12表であるが、水戸野氏の族は大部分が Aurivillus (1923) に従っている。

#### (11) 問題のある日本の族について

##### (i) Ibidionini について

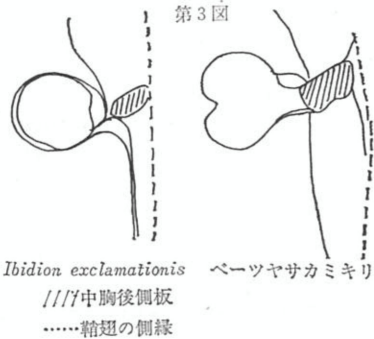
Bates が1877年にペーツヤサカミキリ *Leptoxenus ibidiiformis* を記載した時、この興味ある種は南米の Ibediinae (現在の Ibidionini), 例えば *I.*

*polyzonum*, *sommeri*, *vanum* などに非常に類似していると書いて以来長い間アメリカ大陸以外に産する唯一の Ibidionini として記録されて来た。この取り扱いについては日本でもかねがね疑問視されていたが、1970年 Gressitt と Rondon による「ラオスのカミキリ」中で Methiini に変更されるまでは未決定であった。日本に真の Ibidionini の標本が少なく、またこのペーツヤサカミキリが稀種であった事が解決を遅らせた原因ではあったが、我々がこれを決定し得なかった事は慚愧の至りである。この2つの族の大きな差は、

中基節窩は側方の中胸後側板に開く  
 .....Methiini

中基節窩は側方の中胸後側板に開かない  
 .....Ibidionini

で、その例を北米南部から中米に産する *Ibidion exclamationis* Thomson とベーツヤサカミキリで示したのが第3図である

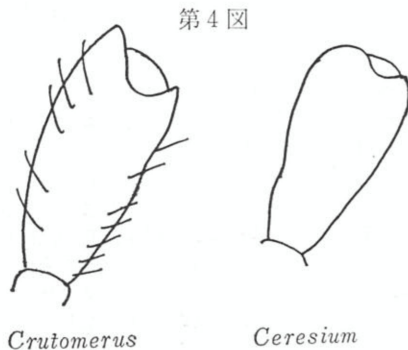


(ii) Callidiopini, Phoracanthini および Elaphidionini について

従来 Callidiopini と Phoracanthini は次の点で分けられていた。

- 触角は節の端にとげを有しない。  
 ..... Callidiopini
- 触角は基部の数節の端にとげを有する。  
 ..... Phoracanthini

ところが Linsley は1963年、「北米のカミキリ」中で、Phoracanthini, Callidiopini を両方とも Elaphidionini のシノニムとし、*Crutomerus flavus* も本族に入れた。しかし Elaphidionini の特徴は触角の基節から数節に突起を有することで、従来 Callidiopini に入っていたこの *Crutomerus* 属は非常に僅かの突起と言えども言えなくはないと言う程度のもので、他の Elaphidionini に属する種とは全く形態を異にする。また Callidiopini をシノニムとすると *Ceresium* などのように、全く触角に突起のないものまで含まれる事となり、不合理と言わざるを得ない(第4



図参照)。このように Elaphidionini 族の特徴が不確定であり、また *Elaphidion* など Elaphidionini とする北米の属と、トビイロカミキリなど従来 Phoracanthini に入っていた東洋区、旧北区の属とは触角の突起に差があるので、日本産のものは Phoracanthini にして置く方が無難と思う。

(iii) Clytini と Anaglyptini

Junk のカタログ中で Aurivillius (1912年) が Anaglyptini は Clytini のシノニムとして以来、日本ではその後この処置が用いられて来た。しかし Linsley (1964年) は Anaglyptini を再び別の族として独立させ、Gressitt と Rondon (1970年) もこれを採用している。両族の差違は

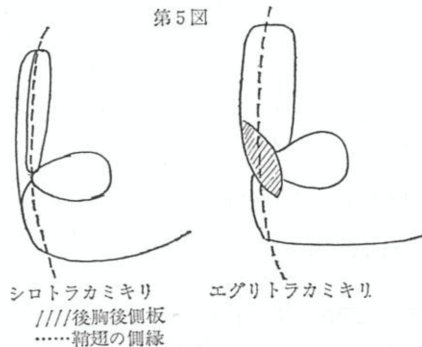
後胸後側板は認められず、後胸前側板は線状である  
 ..... Anaglyptini

後胸後側板は明らかで第1腹節を越え、後基窩の外側を囲む。後胸前側板は普通幅広い。

..... Clytini

カミキリにおいては後胸後側板は見にくいものが多いが、Obriini 族では属の検索に使用しており、2族に分ける方が妥当と思われる。

その差違を第5図に示した。



(iv) Morimopsini と Phrissomini

従来 *Echthistatus* Pascoe なる属の中に入っていた東アジアの種が、Breuning により *Mesechthistatus* (日本産)、*Mimechthistatus* (台湾産) および *Parechthistatus* (日本および支那産) の3属に分けられ、しかも族まで前2属は Morimopsini に、後者は Phrissomini と異ってしまった。これは彼が触角の角稜の形を重視する分類法に従った為で、即ち

触角第1節の端の角稜は完全に取りまいている。  
 ..... Phrissomini

触角第1節の端の角稜は完全には取りまいていない。  
 ..... Morimopsini

しかし Phrissomini に属する天城山のセダコブヤハズカミキリでは角稜の不完全な個体の方が多く、一方 Morimopsini に入っているタニグチコブヤハズカミキリも南アルプスの個体では見方によっては完全に取りまいているとも言える。Breuning の分



類法はこれらの属の所で大きな矛盾を来し、日本産の上記2属が別族である処置は明らかに間違いであると言える。しかし両族の基本属である。*Moriopsis* Thomson (シッキム、アッサム産)も*Pharrisoma* Castelnau (中央アフリカ産)も未だ見た事がないので、どう決定してよいか現在の所不明である。

(v) Hippopsini と Agapantini

Breuning (1961年)は彼のカタログ中では、Hippopsini を *Agapantini* のシノニムとした。しかし従来 *Agapantini* に入っていた種はすべて草食のカミキリであり、一方 Hippopsini の方は材を食べる種類であり、また触角の体長に対する長さの比や、その構造にも差があるので、林匡夫博士の言われているように別族の方が良いと思う。

(vi) Rhodopini か Rhodopinini か?

Rhodopini は Lacordaire (1872年)が *Rhodopis* Thomson (1857) を基本属として設立した族である。しかし Gressitt (1951年)がこの *Rhodopis* なる属はすでに Reichenbach より1854年に鳥類に使用されている事を指摘し、置換属名として *Rhodopina* にすると発表し、この属名を基として族名も Rhodopinini と改名した。

Breuning は *Rhodopina* の方は認めたが、族名の方は認めず、彼のカタログ中では、Rhodopinini を Rhodopini のシノニムとし、また最近の「ラオスのカミキリ」中でも Rhodopini を使用している。

命名法の規約によれば、族名は科グループの規約に従うので、基本属の名前の語幹に *-ini* の接尾語をつけて作らなくてはならないのであるから、*Rhodopina* からは *Rhodopinini* でなくてはならない筈である。同様のものとしては *Apomecyna* → *Apomecynini* がある。

○五十嵐邁氏採集のイラクのタマムシ類

五十嵐邁氏は、1970, 1971 両年にイラクに滞在されて蝶を主として各種の昆虫を採集された。このうち、タマムシ科は下記の6種であった。標本を御恵願った五十嵐邁氏に深謝する。

1. *Julodis onopordi carinulosa* Obenberger  
1♂, Mosul, 8. iv. 1970; 1♂, Sarsang,  
30. vi, 1970.

シリアから記載された亜種である。

2. *Chalcophorella* (s. str.) *stigmatica*  
Schönherr

1♂, Sarsang, 30. vi. 1970.

3. *Chalcophorella* (*Stigmatophorella*)  
*quadrioculata* Redtenbacher

1♂, Sarsang, 4. vii, 1970.

4. *Capnodis porosa* Klug

1♂, Sarsang, 1. vii. 1970.

5. *Capnodis semisuturalis* Marseul

1♂, Sarsang, 4. vii. 1970

6. *Sphenoptera* (*Chilostetha*) sp.

1♀, Sarsang, 2. vii, 1970

この属はトルケスタンからアフリカにかけての乾燥地に極めて多くの種類があり、同定は困難である。  
(国立科学博物館 黒沢良彦)

○有田豊氏採集のアフガニスタンのタマムシ類

名城大学の有田豊氏が1970年夏にアフガニスタンで採集されたタマムシ類は下記の4種である。標本を恵与された有田氏に深謝する。

1. *Chalcophorella* (*Stigmatophorella*) *escalerae* Abeille de Perrin

1♀, Kabul, 27. vii. 1970.

五十嵐邁氏がイラクで採集された *quadrioculata* Redtenbacher によく似た種類であるが、前胸背と翅端の形が異なる。あるいは同一種の地方変異であるかも知れない。

2. *Capnodis miliaris metallica* Ballion

1♂ 2♀♀, Kabul, 23. vii~1. viii. 1970.

3. *Sphenoptera* (*Hoplistera*) sp.

1♀, Dash Terewat, Panjshir, 7. vii. 1970.

4. *Agrilus* sp.

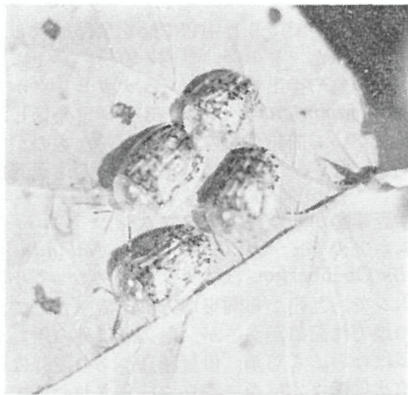
1♀, Dosta-Balacomar (2. 800~3. 300m),  
Comar Valley, 11. vii. 1970.

(国立科学博物館 黒沢良彦)

○カメノコハムシの異常食性

現在、都立大学の大学院におられる鈴木邦雄君がまだ農大の学生だった頃、岩手山の調査に行って帰ってきたとき「カメノコハムシ *Cassida nebulosa* Linné がタラノキにたくさんついていて、これをおっているみたいだった」と話してくれた。しかし、筆者はその頃このような観察例を知らなかったし、また、カメノコハムシの食草といえはすぐアカザ科の植物を思い出し、それ以外ではヒユ科のイノコヅチなどが挙げられる程度だったので、直ちにその話を信用できず、「ハムシ科のものは大発生したとき、その場に食草がなくなると周囲に散って、実際には食うことはなくてもいろいろな植物の上に止まっていることがあるから、多分それと同じケースであろう」という意味のことを答えておいた。鈴木君もあまり詳しくは観察してこなかったらしく、附近にアカザはないようだったからそういうケースではないように思われるということももらしただけで、筆者を納得させるそれ以上のデータがなかったため、話はそのままになってしまった。

その後、筆者はすっかりこのことを忘れていたが、1969年、東北地方を調査した際、青森県階上岳で(7月14日)、タラノキを食うカメノコハムシを発見、忘れていた鈴木君の話を思いだした。やはり鈴木君の観察は本当だったのである。ここではタラノキから7匹のカメノコハムシを採集、葉面には明らかにこのカメノコハムシによると思われる食痕も認められた。念のため3匹を生かしたままタラの生葉とともにポリ袋に入れ、採集旅行中観察し続けたところ、タラの葉はアカザと同じようにカメノコハムシ



第1図 異常食性を示すカメノコハムシ  
(上: タラノキ葉上のカメノコハムシ, 下: ボタンヅル葉上に残されたカメノコハムシの食痕)

によって被害されることを確かめることができた。

タラの葉を食うカメノコハムシは1969年7月18日には津軽半島の清水股岳でも(4匹), また同年8月9日には北海道の洞爺でも(45匹)発見することができた。

階上岳と清水股岳では附近にアカザはみられなかったが, 洞爺ではタラノキの近くにアカザがあり, それにカメノコハムシが大発生し, あぶれた個体がこれに接しているミゾソバの葉に, 更にはタラノキにまではい上っているようであった。しかし, タラノキには食痕がみられたがミゾソバには多数のカメノコハムシがついていたにもかかわらず, その葉に食痕はなく, タラとちがいで, これを食う形跡は全く認められなかった。

以上のことからカメノコハムシがタラノキを食害することは, まず疑いない事実ということが出来る。しかし, ここで注意しておきたいこと, これはすべて成虫によるもので, 自然状態においては幼虫によるタラの食害例は全く発見されていないことである。また, 今日までこのような異常例が観察されているのは北海道南部と東北地方北部だけで, その他方では全く知られていないことである。果して幼虫

の地がタラで成育できるかどうか, また, 上記以外の地方, 特に関東以西や北海道北部でこのような異常食性がみられるかどうか, この2点の究明を今後の課題として提出してみたい。

なお, 青森県岩木山では(1969年7月20日)カメノコハムシの成虫がボタンヅルで獲られたので(3匹), 添食試験をしてみたところ, この植物もまたカメノコハムシによって好食されることが明らかになった。タラノキの場合と合せて, 同様の点を究明して行きたいものである。

(埼玉県鶴ヶ島町 大野正男)

#### ○アオアシナガハナムグリ熊本県国見岳に産す

アオアシナガハナムグリ *Gnorimus viridiopacus* Lewis は九州では英彦山, 障子岳, 祖母山, 霧島山等から採集されているが, 熊本県から未記録のものであった。筆者は最近下記の標本を検査することが出来, 本県にも産することを確認したので報告する。なお報告することを許された早井章, および標本を検査する機会を与えられた直海俊一郎の両君に厚くお礼申しあげる。

1頭, 28. vii. 1971, 熊本県八代郡国見岳, 早井章君採集 (熊本市 大塚 勲)

#### ○アオカタビオロサ新潟県に産す

——越後のオサムシ覚え書(6)——

アオカタビオロサムシは, 我国では北海道と本州北部に分布するが, 本州における産地としては, 従来青森・山形両県が知られているのみであった。

ところが下記の1頭が偶然登山者によって発見され, 生きのまま筆者の手許に届けられたことによって, 新潟県にも産することが判明した。

1♀, 新発田市二王子岳(1,421m)頂上附近, 1971年5月30日, 西了子採集, 筆者所蔵。残雪上を歩行していた由で, 体長24mm(含大腸), 背面は青色をおびた銅色の個体である。

その後, 市内の中学生から同定を求められた標本中に次の1頭があり, 分布はいよいよ確実となった。

1♂, 新発田市焼峯山麓(alt. 約250m), 1971年5月23日, 片野洋一採集, 筆者所蔵。

この個体は体長22mm(含大腸), 黒味がかった青藍色を呈するもので, ナラの樹上から落下したという。

貴重な資料を発見提供された西了子嬢および片野君に謝意を現わす。

(新潟県新発田市 小池 寛)

#### ○西丹沢のゴミムシの記録

本誌 No. 9(June 1970)に柄沢氏の *Parobrosicus crassipalpis* (Bates) の記録があるが, 筆者の手元にも同種の標本があるので報告する。西丹沢の玄倉(くろくら)附近のトラップ(腐肉)に入ったものである。



1 ♀ *Parobrosicus crassipalpis* (Bates)

神奈川県西丹沢文倉 20. viii. 1971 筆者採集  
末筆ながら同定を御願した上野俊一博士に深く  
感謝致します。(東京都港区 森田誠司)

○クロホシビロードコガネの斑紋変化

クロホシビロードコガネ *Serica nigrovariata*  
Lewis は比較的高地性のビロードコガネで、私は山  
形県飯豊山、岩手県焼石岳などで頂上近い尾根に生  
えるミヤマハンノキの葉上に群飛する本種を多数採  
集したことがあるが、その斑紋は千差万別で、全体真  
黒なものから、翅鞘背面が赤褐色になるものまであり、  
赤褐色部の中に散布する黒点も個体によって一  
様ではない。長野県飯縄山でも同様であると聞いた。  
ところが、新潟県北蒲原郡黒川村の胎内川の奥、  
飯豊山麓の海拔 400m の地点で、1971年6月21日に  
採集した本種18頭は溪流の中腹を通る路傍のイタドリ  
、ヨモギ、サワアジサイなどの葉上に、群棲する  
ことなく単独で見出され、全部黒色の個体ばかりで、  
褐色部のあるものは1頭もなかった。一地域に産す  
る本種が全部黒色型ばかりであると云う例はまだ聞  
いたことがない。あるいは一見千差万別と見える本  
種の斑紋も、よく調べてみると意外に地域差がある  
のではないかと考えられる。

(東京都世田谷区、黒沢良彦)

○オナガカツオゾウムシの食草

旧聞で恐れ入るが、オナガカツオゾウムシ *Lixus*  
*moiwanus* KONO の食草については報告がないと思  
うので記しておく。

戦前1935~1942年頃に山形県米沢地方と戦後1945  
~1950年に福島県会津地方で私が確めた本種の食草  
は、他に余り例を見ない植物で、意外にも、セリ科  
のドクゼリ *Cicuta virosa* であった。7~8月の真  
夏に田圃の溝に生えるドクゼリの葉上に本種はよく  
見出される。その状態はタデ科植物の葉上に棲む同  
属のカツオゾウムシ *L. impressiventris* と全く同  
様で、異なる所は体にまぶしている粉の色が赤褐色で  
はなく、黄褐色であるだけである。しかし、どこに  
でもいるわけではなく、産地は狭い地域に限られる  
ようである。また、成虫の出現期も真夏だけに限ら  
れるようである。

(東京都世田谷区、黒沢良彦)

○キイロスズメバチの巣についたヒョウホンムシ

キイロスズメバチ *Vespa xanthoptera* の糞  
巣から見つかる昆虫については立川周二氏が詳しく報  
告しておられる(農学集報第16巻第1号9~13頁、  
1970)が、私はその中にならぬ甲虫を同じキイロスズ  
メバチの巣中から発見しているので記録しておきたい。

1950年夏に福島県会津若松市にあった私の家の門  
柱の銅製の帽子の中にキイロスズメバチが営巣した。  
6月から8月にかけて巣が拡大するにつれて目立ち  
だし、通行人が投石して蜂を怒らせるようになった  
ら、性質が兇暴になり、通行人を境いなく襲うよ

うになったので、9月中旬に蜂を全部捕殺し、巣を  
あばいてみた。その際、巣内の育房の真下に堆積し  
た蜂の死骸や排出物の中からナガヒョウホンムシ  
*Ptinus japonicus* Reitter 3 ♀ を発見した。し  
かし、だいぶ古い話なので他にどんなものがいたか  
憶えていない。(東京都世田谷区、黒沢良彦)

○伊豆諸島から新記録のタマムシ

ムネアカチビナカボソタマムシ *Nalanda rutili-*  
*collis* Obenberger はアカメガシラにつく小型のタ  
マムシで、九州から関東地方に至る主として太平洋  
岸の地方に記録があるが、屋久島以外の離島からの  
記録はない。もち論、伊豆諸島からの記録はないが、  
小宮次郎氏は本種を三宅島で採集されたので記録し  
ておく。

1 ♀、三宅島坪田、7. vii, 1972, 小宮次郎採集  
翅鞘の緑青色が弱く、強く唐金色を帯びる個体で  
ある。(東京都世田谷区、黒沢良彦)

オーストラリア産甲虫標本入荷	
オーストラリア産甲虫標本多数入荷してお ります。主なものをあげると次の通りです。	
<i>Cicindela semicincta</i> (ハンミョウ科)	¥150
<i>C. nigrina</i> ( " )	150
<i>Desera smaragdinus</i> (オオアオホソゴミ シ類)	150
<i>Mastochilus australicus</i> (クロツヤムシ科)	250
<i>Xylotrupes australica</i> (ヒメカブトムシ 1 種)	♂ ♀ 600
<i>Cheiroplatys excavatus</i> (カブトムシ類)	♂ ♀ 600
<i>Anoplognathus punctulatus</i> (コガネムシ科)	200
<i>Anomala antiqua</i> (コガネムシ科)	150
<i>Lomaptera cinnamomea</i> (カナブン類)	300
<i>Agrianome spinicollis</i> (ウスバカミキリ類)	♂ ♀ 1.800
<i>Archetypus frenchi</i> (ウスバカミキリ類)	♂ ♀ 3.000
<i>Batocera boisduvalii frenchi</i> (シロスジカ ミキリ類) 40mm.	♂ ♀ 3.000
<i>Dihammus acanthias</i> (ビロードカミキリ類)	1.200
<i>D. aestheticus</i> ( " )	1.200
<i>D. holotephrus</i> ( " )	1.200
東京都練馬区石神井局私書箱 2 号 大蔵生物研究所	

甲虫談話会

会費 (1 カ年) 500円、第17号は3月末発行予定、  
投稿締切は2月28日。

発行人 黒沢良彦

発行所 甲虫談話会 東京都台東区上野公園  
国立科学博物館動物研究部内